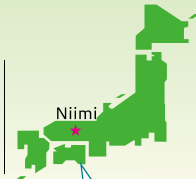


5 遊休農地と地元産品を活用した6次産業化で地域の魅力創造 地域の土壌の希少性を活かしワイン醸造に挑戦する

岡山県・新見市 | 中国銀行

荒れたブドウ畑を再生させたいという地元への想いと異業種参入への情熱。地元企業経営者の新たなチャレンジを自治体と地方銀行がサポートする。

地元産品を活用した6次産業化による事業展開が、雇用を創出し、地域の荒廃を防ぐとともに、新たな魅力を創造する。



新見市の概要

【人口】人口30,154人(2018年2月28日現在)

- 岡山県の最西北端、高梁川の源流域に位置し、東は真庭市、南は高梁市に、そして北は鳥取県日野郡、西は広島県庄原市に接している。
- 新見市の面積は、793.29平方キロメートルで岡山県の11.2%を占めている。
- 新見市は、古代の律令制のもとで、高梁川の東側は阿賀郡、西側は哲多郡と呼ばれ、明治のはじめまで砂鉄を溶かすたたら製鉄が盛んに行われていた。
- 地元名産の千屋牛は、日本最古の蔓牛(つるうし)の系統をひく伝統ある黒毛和種で、2007年6月に商標登録認定を受けた。同市は“千屋牛ブランド”の確立に向け取り組んでいる。



はじめからワインづくりを考えていたわけではない

岡山県の北西、高梁川の源流域にある新見市。標高400mの小高い山にブドウ畑が広がり、シンプルな外観ながら機能性に富んだワイナリーが併設されており、どこかヨーロッパの景観を彷彿とさせる。

tetta株式会社。このドメイン(醸造場を持つブドウ園)を運営する会社名は、新見市哲多町に由来する。同社の代表取締役である高橋竜太氏に会社設立の経緯を聞くと「家業として建設業をやっているが、何か地元でベンチャーをやりたいと思っていた。でも、始め

からワインを作りたい、農業をやりたいと考えていたわけではない」と意外な回答が返ってきた。



tetta 高橋代表取締役

他地域も注目するワインづくりに適した土壌

tettaのブドウ畑は、元は県が造成した農業団地で、以前は別の生産法人が生食用の

ブドウを栽培していた。しかし、経営状況は厳しく、次第に規模を縮小。徐々に土地は荒れていった。

「地元が荒廃していく様を目にするのはつらい。ここ



ワイナリー「domaine tetta」

の土地では、もともと美味しいブドウを作っていた。やり方を工夫すればビジネス性があるのではと思い、いろいろと調査。再生を引き受けることにして、新会社を立ち上げスタッフも引き継いだ。事業もそうだが、この景観も再生させたかった(高橋氏)

高橋氏が事業計画を立てる際の調査で、この地域はヨーロッパの地質に近くワインづくりに適していること、山梨のワイナリーが参入しようとしていたこと、サッポロのワイナリーが試験栽培をやっていたことなどを知った。こうした背景もあるが、新事業として「ワインづくりが一番魅力的だった」こともあって、最終的には自社でブドウ栽培からワインの醸造・販売までを一貫して行う事業を目指すことにした。

ドメイン実現を目指し、プレずに、着実に

2009年にtettaを立ち上げ、2010年春から少しずつワイン用ブドウを植えていったが、開墾から始める必要があった。苗木を植えてからワイン用のブドウを収穫できるようになるまでには、2~3年を要する。ブドウ畑ありきで考えていたため、いきなりワイナリーを作って、ブドウを買ってきてまでワインを作ろうとは考えていなかったという。

ワイナリーをつくるまでの期間は、生産したブドウを県外に持ち出し、ワイン醸造を委託。ボトリングされたものを引き取って販売展開していった。

「この畑のキャパシティでやっていこうと考えていた。畑を少しずつ増やし、委託醸造を増やしながら、徐々に販売を拡大させた。その間、ずっとブランディングに力を入れてきた(高橋氏)

ブランディングは、デザイナーへの活用などコストがかかるので、投資が難しいというが、この地域の石灰岩質という土壌の希少性も

チャレンジを応援してくれた地元銀行

ワイナリー計画段階で、高橋氏は中国銀行新見支店と営業統括部(現ソリューション営業部)に相談。事業計画をブラッシュアップしつつ、資金面も検討。様々な選択肢があったが、総務省の補助金制度を活用することにした。申請手続きには、中国銀行と新見市が連携して尽力。さらに同市は、新産業を対象とした市の補助金制度による支援も行い、同行は補助金支給までの間の資金を融資した。

「会社立上げの際に、いくつかの金融機関に相談したが、応援してくれたのは中国銀行だけだった。同行営業統括部の担当者のアンテ

この空間でワインと地元産品を味わってほしい

tettaのワイナリーは岡山出身の世界的なインテリアデザイナーが設計。建物自体もアートのような。レストラン・カフェスペースからはガラス越しに醸造作業を、テラスからはブドウ畑を一望することができる。

新見市は、日本最古の蔓牛(優良な系統の和牛)として知られる千



あり、それをブランディングに上手く取り入れた。在庫を抱えることもなく、販売実績を積み重ねていった。

そしてついに自社のワイナリーを立ち上げた。2016年、会社立上げから7年後のことだった。



ナが高かったことや、新見支店長が活動的だったという人的な面が大きい。チャレンジしようとする企業を応援しようという器量のある銀行の存在はありがたい(高橋氏)



ぶどう畑を一望できるワイナリーのテラス

屋牛や、清流を利用して養殖されているチョウザメの卵を商品化したキャビアなど、ワインと相性の良い食材が豊富。

地元の食材を堪能しながら、ワインを楽しみ、ブドウを育んだ畑をテラスから愛でる。このワイナリーは、地域の贅沢な味わい方を提供してくれる。

